

日本文学研究会

平成三十年二月二十一日

宗祇と名所

教授 岸田 依子

室町後期に活躍した連歌師宗祇は、箱根湯本で客死するまで、終生諸方への旅に赴いたが、その旅の人生とも関連して注目されるのが宗祇の「名所」に対する深い関心である。

『白河紀行』『筑紫道記』の紀行文における名所はもとより、寛正五年正月一日詠『宗祇独吟百韻』（発句のみ専順作）、文正二年（文明二年とする諸本もあり）正月一日詠『宗祇独吟百韻』（自注あり）の名所百韻、名所を列挙した『宗祇名所和歌』あるいは連歌論書『浅茅』後半部における、中世の他の連歌論書や連歌学書には類例を見ない、一八七の名所と証歌・寄合語を一括して掲載した名所に関する大部の記載などがあり、『実隆公記』にも宗祇の名所や歌枕に関する談話の記事が折々見える。本発表では、主として独吟の「名所百韻」二編の名所と『浅茅』収載の名所を対象に、鎌倉時代以降同時代に至る名所歌集の名所との一致度を調査し、その特性の一端について考察し、宗祇の句集や百韻・千句の付句や付合における宗祇の名所句の詠法や付合の技法等について考察するうえで一つの布石とした。

太宰治の旅

教授 元吉 進

近現代の文学者で、太宰治ほど旅行をしなかった人も珍しいとされる。旅の時期と行先、同行者を一覧表にまとめると、太宰の旅の特徴がいくつか指摘できる。まず第一に、単独行が少ないことで、友人知人、家族との旅が多い。これは、大名旅行的に若様気取りで、人任せであった実家津島家の旅行形態が影響しているだろう。また、曾遊の地を繰り返し訪れていることも特徴である。さらに、旅の西限は三保の松原で、京都、関西に足を運んでいない。これには、『津軽』に見られる都・中央に対する反骨意識、津軽人としてのプライドが根底にある。最後に、川端康成が『伊豆の踊子』の舞台とした湯ヶ野温泉福田家旅館は太宰も宿泊したが、『東京八景』等の作品には全く川端関係の言及が無い。太宰の芥川賞落選以降、川端は太宰作品を評価しているので、太宰が言及しないのは、川端個人への屈折した意識というより、妻美知子が書くような「作家は自分一人」という自尊心のなせる結果ではないだろうか。